

## 【コメント】

黄 曉芬

紀元前一千年紀から西暦904年まで、16の王朝と政権が西安に都を築いた。本稿は、古都西安の発生と変遷の歴史、それに映された文化的要素を通史的視点で振り返りながら、古き新しい都市像を展望したものである。

最初、西安市に登場した都城遺跡は西周の豊・鎬京で、考古学調査によって宮殿・宗廟・生産工場の存在、王室・貴族墓地の配置が確認され、強い王権思想を表わすものであった。そして、秦の都咸陽は水陸交通の要衝である関中平原の中心部に立地し、咸陽宮の造営を含んで都の豪華と機能性を重視し、世の中を驚かせた建築の所々が皇権思想を色濃く打ち出した。それを受け継いだ漢の長安城は建造当時、全体的計画性を欠き徐々に築き上げたもので、先帝の宗廟建築をはじめ宮殿・官署建築が都城全体面積の3分の2を占めている。

唐長安城は隋の大興城を踏襲、修正したもので、高い城壁で厳重に護られた都城は、北にある帝王の居住する宮城と皇城を中心に、東西南北の大通り、大道をはさんで、東・西市、条坊が左右対称で整然と配置されている。こうした平面プラン、都城計画や建築規模は、後世に都城建築のモデルとなり、周辺諸国にも大きな影響を及ぼした。歴代の封建帝王が追い求めていた地上の天室・人間界の仙居を表したものである。

五代以後、西安は地方政治の中心に変わった。そして、明清王朝は西北領土を守るため、西安府城が設立され、政治・軍事面を重視した上で、西北地区の最も重要な経済都市となった。

30年代、西安は国民党政府によって「西の京」という準都に指定され、東西鉄道幹線を開通させ、人口の増加や工業建設に伴って、近代化の足並みも加速した。新中国が成立した後、現代化の都市建設へと進んだ西安は50年代、旧ソ連の都市計画理論を参考し、工業都市として成長しつつあった。その後「文化大革命」の影響をうけ、第三産業が縮小され、文化財や名勝古跡の破壊が目立った。70年代に「保存・復元・建替と新規開発を通じて、都市建設と伝統的特色を一体化する」という新策を打ち出して紡績・機械工業を中心とした科学研究、文化教育、観光業の発展に一步前進が見えた。90年代になると、独特な歴史と文化を保ちながら、先進技術産業と第三次産業の繁栄を促進し、現代化が進められ、一流の国際都市を目指している。

三千年の歴史にわたる西安の都市像を通してみれば、漢・唐長安城の設計と建設は、中国的都城思想を主軸に展開してきたもので、東アジア地域にも多大な影響を与えていた。その後も戦争と反乱、回復と発展を繰り返しながら、近代化への転換が完成した。今、古都西安は、現代社会の経済発展と環境問題を抱えながら、歴史文化遺産の保護・修復や現代社会における新しい都市建設との共存・共栄など、推進すべき研究課題が多岐にわたる。そこで、人と自然の共存を主張する「天人合一」の思想は、中国の伝統的理念に根ざしたもので、これからも緑豊かな古都西安の建設に対して、精神的な支えになることでしょう。

(東亜大学総合人間・文化学部)